雲州平田　町並みの歴史

島根県建築士会　石川良一

平田に関する記述は、「出雲国風土記」 に爾多郷（沼田郷）として記されています。この地名から豊かな水があり、稲作に適した地であったことが伺われます。

1300年代の前期には近江商人らによって開拓がなされ、以降在郷の商人の町として栄えました。そして鹿児島県資料「家久君上京日記」1575年を参照すればすでに、かなり大きな町並みが存在していた事がわかります。また「坪内家文書」1569年の中にある平田目代連署書状の文面から、当時の商人の生き生きとした暮らしぶりが感じられます。またこの戦国時代に平田屋佐渡守による、町割り（都市計画）が行われ、現在の平田の町の原型が出来ています。今もそのなごりである防御用の鉤型路や、袋小路を意味する袋町という町名や、船川と湯谷川、後川を利用して城下町の堀川のように町をぐるりと取り囲んだ形態は、戦国時代の戦乱を意識した町割りだったということがよくわかります。平田屋佐渡守はこの後毛利家吉川氏に請われ広島の城下町を設計することになります。

江戸時代になりますと、月山富田城から松江に城が移り松江は城下町として栄えましたが、平田は物資の集散地でそれに続く大きな町として、17世紀半ばには地銭帳にみられるように町の形態が整えられ、農村地域の消費を背景として繁栄しました。本町通りには、儀満本陣、木佐本陣があり、町の片側半分近くの土地を有していたとの話も伝えられています。当時松江藩の主たる収入源は米であり、これに次いで原手の綿花、山手の砂鉄が重要であり、大阪で声価を得た「雲州平田木綿」の集散地として賑わい、木綿業を中心とした商人らによる文化の全盛時代を迎えています。儀満家および斐川の勝部家を中心とし、斐伊川の土砂を利用した「川違い」を行い大規模な新田開発も行われました。

明治時代になると、綿花に代わり養蚕を行い木佐家を中心として製糸業が発達し、明治末期には生糸の町として、県下第一の工業都市として栄えました。

木綿街道の年表

西暦・年号	平田の歴史	綿の伝来	木綿街道の歴史	日本の歴史
594年	鰐淵寺創建			
799年		漂着したインド人が 持ち込んだが栽培に失敗		
894年	一畑薬師創建			
1185年				鎌倉時代始まる
1243年		中国から伝来		
1247年頃		大阪近辺で栽培されたが 応仁の乱で広まらず		

街並の歴史

西暦・年号	平田の歴史	綿の伝来	木綿街道の歴史	日本の歴史
1313年(正和2年)			小村長政(近江国の住人、土佐守藤原朝臣輝政の二男)近江より移住	
1319年(文保3年)	戸数17戸の村落形成(文保年間の平田)			
1333年				鎌倉時代終わる
1336年				室町時代始まる(1336～1392南北朝時代、1467～戦国時代)
1394(応永1年)			熊野神社分霊勧請	
1402年(応永9年)	康国寺開創			
1467年				応仁の乱
1521年		西国の農民が関東で種を売る		
1535年頃		ポルトガル人が持ち込むが10年で絶滅		
1568年				安土桃山時代始まる(信長入京)
1569年(永禄12年)	坪内家文書に平田の商人についての記載あり			
1573年				室町時代終わる
1575年(天正3年)	島津家久君上京日記・・・平田泊			
1588年(天正16年)			熊野神社改築 棟札に平田屋佐渡守、小村氏、杉原氏の名前	
1598年				安土桃山時代終わる(秀吉の死)
1600年				関ヶ原の戦い
1603年				江戸時代始まる(江戸幕府開府)
1633年(寛永10年)	斐伊川大洪水西流(日本海へ)→東流(宍道湖へ)			
1650年頃		中国から大量の棉の種が入り西日本から全国へ伝播		
1657年	平田町戸数130戸			
1658年(万治元年)	楯縫郡平田村発足			
1659年(万治2年)	加藤屋火事			
1681年(延宝 9年)	平田町正式認可			
1681年(延宝 10年)	平田町戸数173戸			
1686年(貞享3年)	薬師下～布崎間の新田開発始まる(儀満、勝部、石橋)			
1688年(元禄 1年)			新町火事	
1700年代		棉栽培の爆発的な広がり		
1704年(宝永年間)			川違い始まる	
1704年(宝永 1年)	玄弥火事(平田大火)			
1715年(正徳年間)			川違い終わる	
1715年			來間屋生姜糖本舗創業	
1723年(享保 8年)	薬師下～布崎間の新田開発完成(儀満、勝部、石橋)			
1723年(享保 8年)	平田町全焼(報恩寺火災)			
1730年(享保 16年)	十王堂火事			

街並の歴史

西暦・年号	平田の歴史	綿の伝来	木綿街道の歴史	日本の歴史
1733年(享保18年)			平田船川改修	
1750年頃			本石橋邸築造	
1752年(宝暦2年)			石橋酒造創業	
1753年(宝暦3年)	天満宮の行事 「御神幸(おたび)」始まる			
1783年(天明3年)			新町大火	
1792年	平田町戸数293戸			
1793年(寛政5年)	平田一式飾り始まる			
1800年			三井家との木綿取引開始	
1805年(文化2年)1月14日	熊野神社焼失			
1812年(文化9年)	熊野神社遷宮			
1819年(文政2年)	本町火事			
1862年	平田町戸数712戸			
1867年				江戸時代終わる(大政奉還)
1868年				明治時代始まる (明治政府の成立)
1872年(明治5年)			本石橋邸に郷校開校 (石橋孫八、長崎堅造を教師として)	
1873年(明治6年)3月17日	平田一番小学 (現 平田小学校)創設 県下の小学第一号			
1875年(明治8年)			加藤醤油創業	
1875年(明治8年)2月	平田本町 大橋南詰めに屯所 (現・平田広域交番)設置			
1877年(明治10年)			酒持田本店創業	
1878年(明治11年)	雨森精翁の私立学舎 亦楽舎開校			
1881年(明治15年)	雨森精翁の死去により 私立学舎亦楽舎廃校			
1888年(明治 21年)				綿花輸入関税撤廃
1898年(明治30年代)			木綿の取引きが 急激になくなる	
1898年(明治30年)			岡茂一郎商店創業	
1912年				明治時代終わる (明治天皇崩御)
1912年				大正時代始まる (大正天皇即位)
1912年(大正元年)12月27日	北浜村唯浦海難事故			
1913年(大正初年)頃			持田醤油店創業	
1914年(大正 3年)	一畑軽便鉄道・出雲今市 ～雲州平田間開通			
1916(大正5年)	常磐座設立			
1925年(大正 14年)	一畑軽便鉄道が電化と なり、一畑電気鉄道 株式会社に社名変更			
1926年				大正時代終わる (大正天皇崩御)
1926年				昭和時代始まる (昭和天皇即位)
1947年(昭和22年)	平田中学校創立			

街並の歴史

西暦・年号	平田の歴史	綿の伝来	木綿街道の歴史	日本の歴史
1951年（昭和26年）	平田町合併 （平田町、久多美村、東村、檜山村、灘分村、国富村、西田村、鰐淵村）			
1951年（昭和26年）	台風15号（ルース台風）により船川が一面大河と化す			
1952年（昭和27年）5月	平田博愛病院 （現・総合医療センター）開設			
1953年（昭和28年7月）	平田唯一の私学光学園 （現・光幼稚園）創設			
1955年（昭和30年）	平田市誕生（平田町、佐香村、北浜村合併）			
1958年（昭和33年）	瑞穂大橋完成			
1960年（昭和35年）	一畑パーク開園			
1962年（昭和37年）	常磐座閉館			
1964年（昭和39年）	西代橋完成			
1970年（昭和45年）	「雲州平田駅」から 「平田市駅」に改称			
1978年（昭和53年）11月	初のひらた祭り開催			
1978年（昭和53年）	鰐淵鉱山閉山			
1978年（昭和54年）	一畑パーク閉鎖			
1978年（昭和54年）	第1回一畑薬師 マラソン大会開催			
1982年（昭和57年）	くにびき国体開催（平田市では卓球と高校野球が行われた）			
1984年（昭和59年）2月	上田町火災			
1989年				昭和時代終わる（昭和天皇崩御）
1989年				平成時代始まる
1989年（平成元年）7月 31日	報恩寺火災			
1989年（平成元年）10月1日	旧本陣記念館開館			
1991年（平成3年）	台風19号襲来 被害総額7億6700万円			
1992年（平成 4年）	湖遊館開館			
1995年（平成7年）			テレビドラマ「いつか また逢える」の舞台に	
1995年（平成7年）	美保町火災			
2001年（平成13年）			第1回おちらと木綿街道 イベント開始～継続中	
2001年（平成13年）			「木綿街道」と命名	
2001年（平成13年）			宮の町 小村俊美邸全面改修	
2003年（平成15年）			第1回節分イベント～ もち街木綿街道開始～継続中	
2004年（平成16年）			木綿街道商業振興会設立	
2004年（平成16年）			国土交通省 「夢街道ルネサンス」認定	
2005年（平成17年）3月22日	市町村合併により 出雲市となる			
2005年（平成17年）	「平田市駅」から 「雲州平田駅」に戻す			
2005年（平成17年）			出雲市立木綿街道交流館 開館	

街並の歴史

西暦・年号	平田の歴史	木綿街道の歴史	日本の歴史
2005年（平成17年）		本石橋邸 一般公開開始	
2006年（平成18年）		平田船就航	
2006年（平成18年）		來間屋生姜糖本舗全面改修	
2007年（平成19年）		石橋酒造廃業	
2007年（平成19年）		片原町佐藤邸空きスペースに 「機織り体験場 木綿屋」を整備（木綿街道振興会）	
2008年（平成20年）		住民協定「木綿街道まちづくり協定」締結 修景事業開始	
2009年（平成21年）		旧石橋酒造を出雲市土地開発公社が購入	
2010年（平成22年）5月20日		石橋家住宅主屋、茶室、向座敷の三棟が 国登録有形文化財として登録「本石橋邸」	
2010年（平成22年）		木綿街道商業振興会を「木綿街道振興会」に名称変更	
2010年（平成22年）		平成22年度住まい・まちづくり担い手事業補助金採択 「旧石橋酒造の継続的な活用に向けた活用実験」 事業実施（木綿街道振興会）	
2010年（平成22年）		旧石橋酒造に木綿街道振興会事務局を設置	
2010年（平成22年）		地域づくり総務大臣表彰授賞（木綿街道振興会）	
2011年（平成23年）		あしたのまち・くらしづくり活動賞 内閣官房長官賞受賞（木綿街道振興会）	
2011年（平成23年）		町並み調査開始 鳥取環境大学浅川研究室の協力により（木綿街道振興会）	
2012年（平成24年）		「木綿街道町並みガイドの会」を設置（木綿街道振興会）	
2012年（平成24年）		島根景観賞　景観づくり貢献賞受賞（木綿街道振興会）	
2013年（平成25年）		住まいのまちなみコンクール 国土交通大臣賞受賞（木綿街道振興会）	
2013年（平成25年）		町並み調査報告書刊行（木綿街道振興会）	
2013年（平成25年）		片原町旧足立邸Caféことん改修開始（木綿街道振興会）	
2013年（平成25年）		旧石橋酒造閉鎖	
2014年（平成26年）		片原町旧足立邸Caféことん開業（木綿街道振興会運営）	
2014年（平成26年）		中国地方地域づくり等助成事業大賞授賞（木綿街道振興会）	
2014年（平成26年）		古民家あかりに木綿街道振興会事務局を移動	
2015年（平成27年）		「木綿街道探訪帖」事業開始（木綿街道振興会）	
2015年（平成27年）		宇美神社縁切縁結参詣企画開始（木綿街道振興会）	
2016年（平成28年）		出雲市立木綿街道交流館 指定管理者変更（木綿街道振興会）	
2016年（平成28年）		ごはん屋棉の花開業	
2017年（平成29年）6月28日		酒持田本店店舗兼主屋、旧蔵、検査場の三棟が 国登録有形文化財として登録	
2017年（平成29年）		旧石橋酒造が活用に向けて動き出す	
2017年（平成29年）		（株）NOTEとの連携開始	
2018年（平成30年）		（株）クロスロードが旧石橋酒造を購入	
2018年（平成30年）		Caféことん閉業⇒サブリースへ「トラットリア814」開業	
2018年（平成30年）		旧石橋酒造改修工事開始	
2019年（平成31年）3月29日		酒持田本店の向座敷、土蔵の二棟が 国登録有形文化財として登録	
2019年			平成時代終わる
2019年			令和時代始まる
2019年（令和元年）		旧石橋酒造母屋改修工事完成 NIPPONIA出雲平田木綿街道　開業	

本石橋家の歴史

本石橋邸は、木綿街道でもっとも古い1750年頃の建物です。当時の地主の家でした。町家特有の切妻造りですが、間口の狭い妻入り造りの母家の間口を広くするために両脇に錣葺きを設け、間口を五間半に広げています。

本石橋家の先祖

祖先は、もともと鎌倉幕府を開いた、源　頼朝（今の大河ドラマ義経の兄）の家臣であったようですが、天下の権勢が北条氏に移った頃から、武家を捨てて西に下り、江戸時代のはじめ、約250年ぐらい前と思われますが、出雲大社の近くを選んでこの地に居をかまえたのではないかと推定されます。（宝暦年代・1750年頃）はっきりしたものが残っていません。

石橋家について

石橋家は、当地方の指導者を生み出し、平田の開拓、産業振興、教育の充実に力を注いでいます。中でも、江戸時代末期から明治にかけて活躍した石橋孫八氏（弘化4年～大正4年）は本人も漢学者でありましたが、日本を代表する漢学者、国学者を招き、出雲地方の学問振興につとめ、自宅の本石橋を開放して郷校（いわゆる塾のようなもの）という学校を開いて子弟教育に力を入れました。

また、孫八氏の父道喜氏はたまたま、石州の津和野藩士で当時の尊王運動の指導者でありました大国隆正を幕府の追求から、かくまい、「はしご階段」と「かくし部屋」を設けたと云われます。
「はしご階段」は今も残されています。

幕末の国学者大国隆正と本石橋家

歴史の上では、大国隆正は文久3年今から142年前（1863年）に平田の豪家石橋道喜宅に滞在し、「国体異同辨」を著すとあります。5ヶ月間ぐらいの滞在と伝えられます。また、明治中期には、国政にも参画する政治家でもありました。石橋孫八氏の4男正彦氏（明治17年～昭和16年）は平田町長、県議会議員として地方行政に功績を残し、特に農業振興（生産の増強と小作問題の解決に盡す）に力を尽くし、「農民の父」とも仰がれました。

木綿街道交流館（旧長崎医家）の歴史と由来

外科御免屋敷と称される旧長崎医家

この交流棟は、1738年に長崎という方が新町の金具屋に借家をして外科を開業された。その4年後1742年に外科御免屋敷をいただき1927年（昭和2年）まで代々開業をしてこられた外科の名門医の屋敷を建替えされたものです。

二階が調合の間。対し先ず持って厚く御礼申し上げます。さて、あれ以降に新事実が数々判明しました。

“旧長崎医家”は文献に裏打ちされた希少な町医の建造物と判明！！外科御免屋敷にて候旧長崎医家には、元祖の正伯翁が備忘録として記録した『永代万留帳』と題された資料が保管されていました。この冒頭には「外科御免屋敷之事」が記述されています。注釈すれば、外科は医学の一分野で創傷を治療し、内外の諸器官の疾患に手術を施す。この語は『解体新書』以前からある漢方医学からの古い用語である。

付けたりですが、内科もそうかと思ったら、さにあらず漢方では本道（ほんどう）と呼ぶそうである。ご免ご免は、失礼した時の言葉であるが、御免とは、免許証がそうであるように「許される」である。では、なにが許される屋敷かといえば、当時の税の納付が許されたのである。江戸時代、村々では主として年貢と言って米で納めた。

名医の屋敷が町家保存「交流館」として生まれ変わる

町（人口密集地※）では、地銭（じせん）と称して宅地に課税され、銀銭をもって納税することが定められていた。と言って、松江藩が外科医に対して直接免税措置をとった訳でもない。住民の生命保持保全に重要な医療。これに携わる医者の定住は地域社会にとって今も昔も切実な市民生活の問題であった。この対策として、町組織が住民の医療充実からとった策である。その資格ありと街が認めた医者に対して、屋敷を給し、宅地に課された税を町で負担し、住民の福祉厚生に応えて当初の市の案では、この由緒ある屋敷は破壊され軽量鉄骨造の交流館が建設されることになっていた。この度の改正案では、「外科御免屋敷」の重要性と町並みの景観保全から、伝統的な木造建築による町屋風交流館に変更し、既存の旧長崎医家は保存して交流館の核として活用され保存されることとなった。

改めて知られる医家の間取り

元文3（1738）年、長崎祐伯と改名し新町の金具屋借家にて開業した。認められ寛保2（1742）に外科御免屋敷を給わってから昭和2（1927）年当主の死亡までの約200年の長きにわたって新町の地で代々開業してこられた外科の名門医の屋敷があわや消えようとした。重ねて、全面ではないが保存されることを、みなさまとともに喜びたい。　先に紹介した古文書の出現によって、今まで墓石の銘文と断片的な資料でしが判らなかった多くのこと知られるようになった。

江戸時代から綿々と続いた医家の由緒ある建物であることが判明したことにより、この事実を裏付ける医家として重要かつ特徴的な間取りが遺存することに、改めて気づいた。近世の医者の多くは漢方医学であったから、今のように診察室や処置（手術）室のような医療専科の間取りではなかった。

ただし、漢方医宅の特徴は、漢方薬を調配合する「調合之間」の存在であった。漢方薬を飲まれた方、とくに生薬を自宅で煎じて飲まれた方ならよくご存じであると思うが特徴のある臭気。お客様をとおす奥の間や、家族団らんの居間の横に、そのような部屋があっては生活が重苦しい。今日でも医者は市民層にあってハイクラスである。　加えて、薬の調配合は一子相伝ではないのにせよ、秘伝中の秘伝であったことから、通りを歩く人様にも見えたり、日の射す店先に近い部屋に設ける訳にもいかなかった。広い土地のない町屋の医家ではその解決策として、屋根裏利用が考えられた。通気に工夫を凝ら　※市内で他に地銭を納めた場所は、猪目、十六島本郷、小津等がある。